

2013 年もあと 10 日程となりました。とても慌ただしい時期ですが、子どもたちには、楽しいクリスマスとお正月がやってきます。

現在会員登録数 1,301 人さま。今年 1 年のご愛読ありがとうございました。次号は新年 1 月 21 日発行の予定です。／

☆。.:\*。★。.:\*。☆。.: 目次 \*。☆。.:\*。★。.:\*。

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》 YO! この本読んだ? Yasuko's & Okiko's Talk

《2》 読書活動ボランティアのためのワンポイント 40

《3》 サイト紹介 ー子どもの本をリサーチするー

《4》 行って来ました!

【3】全国イベント紹介

【4】プレゼント

☆。.:\*。★。.:\*。☆。.:\*。★。.:\*。☆。.:\*。★。.:

■  
【1】お知らせ ☆

● 「ニッサン童話と絵本のグランプリ」受賞作品が出版されました

当財団主催、「第 29 回ニッサン童話と絵本のグランプリ」(平成 24 年度実施)の受賞 2 作品が、BL 出版より出版されました。

『わけありリンゴのアップルパイ』あさいゆうこ/作 童話部門最優秀作品  
あべまれこ/絵 (第 16 回絵本部門最優秀賞受賞者)

『ゆみちゃんはねぞうのわるいこです』みやざきあけ美/作・絵 絵本部門  
大賞作品 表紙写真はこちらからご覧ください。↓↓

[http://www.iiclo.or.jp/07\\_com-con/02\\_nissan/index.html](http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/02_nissan/index.html)

● 当財団編『子どもの本 100 問 100 答』(創元社)が好評発売中です。

子どもの本に関わる質問や疑問を 100 問にまとめて答えた「子どもの本ハンドブック」。子どもに本を読んでほしいと願っている人や図書館、家庭文庫や読書推進に関わる諸団体のための手軽で便利な相談ツールとして編集しました。書店等でお求めください。

書名: 子どもの本 100 問 100 答 司書、読書ボランティアにも役立つ

一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団/編

発行: 創元社 2013 年 8 月 A5 判 224 ページ 1,800 円(税別)

[http://www.iiclo.or.jp/06\\_res-pub/05\\_publication/index.html](http://www.iiclo.or.jp/06_res-pub/05_publication/index.html)

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いします。

お申し込み、詳細は → <http://www.iiclo.or.jp/donation.html>

---

## 【2】コラム ☆

---

\*\*\*\*\*

《1》 Y O ! この本読んだ? Yasuko's & Okiko's Talk

\*\*\*\*\*

『ラブ・ウール100%』 井上林子/作 のだよしこ/絵 フレーベル館

2013年11月 対象年齢：小学校高学年以上

あらすじ：中学1年生のアミコは10月の終わりに転校した。ある日、図書室で編み物の本を見つけ、親友のきゆうちゃんとお揃いのマフラーを編もうと意気込み、無料で編み方を教えてくれる「ニットカフェ・モヘア」へ行く。そこには浮世離れたモヘア先生と12匹の猫と長いターバンのような物を編んでいる小6のきよかちゃん、アミコの隣のクラスのピチコ、モヘア先生の甥で編み物がうまい羊介が集まる場所になっていた。アミコはちょっと変わった仲間たちと心を通わせていく。

Y：クリスマスらしい楽しくて心があたたまる作品が登場しました。

O：ニットカフェ・モヘアは、ちょっと変わっていると周囲からみられている子どもの居場所と設定されていて、そこに入っていきというしかけを楽しみました。

Y：転校したばかりで友だちがいないアミコ、彼氏とラブラブで周りから引かれているけれど、恋愛に一途なピチコ、友だちとけんかして仲直りの糸口が見つけれないきよか、中1になってもサンタクロースを信じ、ひとり「天文部」をやっている羊介くん、みんな孤独を抱えています。そして結末では、それぞれが前向きに生きていけるようになってほっとします。

O：モヘア先生が夏は世界中を旅していて、サンタクロースと友だちというファンタジ的な要素が効いていますね。リアリズムの手法では、息苦しくなるところをありえない物語として昇華したというか。

Y：そうですね。肩の力を抜いて楽しみながら、友だち関係の悩みに共感できるという作りが読みやすいと思いました。

O：編み物って、やっていくうちに、とりこになりますよね。手作りのおもしろさかな。

Y：12匹の猫たちもカフェにいる人たちを癒してくれますし。モヘア先生は猫と住んでいて不思議な存在で魔女みたいですね。

O：さし絵もおしゃれで。

Y：線で描かれたポップな絵が毛糸のようで、物語が編み込まれているというイメージがわいてきます。

O：ピチコをはじめとする人物が、ちょっと平面的かな、ここは文章がもっとしゃれていたらいのに…なんて思いながら、乗せられて読んでしまいました。

\*\*\*\*\*

《2》 読書活動ボランティアのためのワンポイント 40 ☆

\*\*\*\*\*

その7 プログラムの立て方(2) 全体の構成を考える：冒頭

おはなし会のプログラムを立てる際には全体の構成を考える必要があります。時間の長さによっても対象年齢や人数によっても異なりますが、まずは、最も聞きごたえのある物語性のあるおはなしや絵本をどこに持ってくるかを考えます。

一般的には、冒頭ではテーマを紹介し、おはなしを楽しむ場を作るようにします。例えば、「くだもの」をテーマにしたおはなし会であれば、『くだもの』（平山和子/作 福音館書店 1981年）のようにさまざまなくだものが紹介されている作品を読むことができます。この作品は比較的短く、くだものが写実的かつ芸術的な絵で描かれているため、子どもたちがページをめくるたびに絵本に集中する様子が伝わってきます。

また、冒頭にテーマに関わる詩を読むこともできます。冒頭があまり長すぎるとメインのおはなしを聞く前に子どもたちが疲れてしまいます。また、盛り上がりすぎると続けるのが難しくなりますので、参加型の絵本や紙芝居を読む時はその点にも留意する必要があります。

ボランティアをされている方から「おはなし会の冒頭に適切な絵本を紹介してほしい」という相談を受けることがあります。絵本に「冒頭向き」や「メイン向き」があるわけではありません。一冊の絵本としての評価が重要です。

もちろん、決まりはありませんので状況や選ぶ作品によっては、集中力のある冒頭にメインの作品を持ってきて、後はゆっくりくつろいで余韻を楽しんでもらうというプログラムの立て方もあるでしょう。大切なことは聞き手の状況を理解し、どのような構成が最もおはなし会を楽しんでもらえるかと考えることです。

\*次号は「その7 プログラムの立て方（3）全体の構成を考える：メイン」の予定です。質問や意見をいただきましたら、お答えしていきたいと思いません。（Y）

\*\*\*\*\*

《3》 サイト紹介 ー子どもの本をリサーチするー ☆

\*\*\*\*\*

一次資料データベース篇 20 回目。ご紹介するのは以下のサイトです。

●白百合女子大学図書館 江戸末期子供絵本類データベース

<http://www.shirayuri.ac.jp/lib/about/collection/index.html>

今回は、江戸期に発行されていた子ども向け絵本のデータベースをご紹介します。日本の場合、子どもの本という概念は、明治 20 年代に社会的に認知されていきます。しかし、それに先立つ子どもの本がなかったかといえば、決してそうではありません。

近世初期には、木版印刷によって一定の大量生産が可能になり、寺子屋の普及も相俟って、子ども向け絵本なども作られて流通しました。少なくとも、延宝 6 年（1678）には子ども向け絵本が出版されていたという研究報告もあります。この頃から幕末、明治初期にかけて、子どもに物語を提供する豆本

や絵解き、絵双六、組上げ、立版古と言われるおもちゃ絵などの刷物や、あるいは往来ものと呼ばれる前近代の教科書が多く刊行され、これらは明治期にも引き継がれて子どもに届けられていきます。

このデータベースは、それら江戸期の子ども向け絵本類を画像化したもので、「桃太郎」や「かちかち山」「浦島玉手箱」などのよく知られた昔話類や、「今昔物語」など説話をベースにした「金時一代記」などの英雄豪傑譚が収録されています。

各資料の解題や翻刻が掲載されていないのが少々残念ですが、和服姿の擬人化された動物たちのユーモラスな絵を見るだけでも十分楽しめます。また、「舌切雀」「花咲爺」はそれぞれ3話が収録されており、見比べることも可能。江戸期の子ども向け絵本、ぜひご覧ください。(J)  
※次号は、一次資料データベース篇〈その21〉の予定です。

\*\*\*\*\*

《4》 行って来ました! ☆

\*\*\*\*\*

美術館「えき」KYOTOで開催されている「クヴィエタ・パツオウスカーとチェコの絵本展」に行ってきました。

最初のパツオウスカーの部は、「いろのおと」「紙のおしゃべり」「かたちのふしぎ」「あそび」「おはなし」の5章に分けて、9冊の絵本の原画や紙の彫刻などが展示されています。チェコの作家パツオウスカーは85歳の現在も創作を続け、色彩の魔術師と言われています。どの絵も色鮮やかで、描かれるものの形がおもしろいです。

絵本『日々の色』は、長くページがつながった蛇腹のような形で、穴が開いていたり、反射する紙が使われていたり、しかけがたっぷりです。その原画の解説には、曜日には色があると思っていた子どもの頃のエピソードが添えられていて、小さいころからそんな特別な感覚があったんだと納得しました。

日本語の絵本のために描きおろされた『紙の町のおはなし』(ゆうきまさこ/訳 小学館 2000年)に出てくる和紙を使った立体的な作品は、凧やでんでん太鼓が思い出されました。『ヘンゼルとグレーテル』や『シンデレラ』の絵は、「文章の説明として絵を描くのではない」という解説どおり、一見、黒地に描かれた鮮やかな色が怖いような絵も、おはなしを想像しながら見ていくと物語世界を象徴的に描いていることがわかります。

チェコの絵本の部では、ヨゼフ・チャペックの『長い長いお医者さんの話』の「郵便屋さんの話」の原画や、イジー・トゥルンカのパペットアニメの人形や、プラハ在住の出久根育の石膏に描かれた『十二の月たち』の原画などの他、日本で出版されたチェコの絵本がずらりと紹介されていて、盛りだくさんの原画展でした。(K)

---

【3】全国のイベント紹介 ☆



